

- ・近年の幼児期の子どもは、少子化により、地域での集団遊びを通じた多様な経験や、協同性を培う機会が少なくなっており、言葉で気持ちを伝えたり、相手の意見を聞くことや物事に集中して取り組むことが苦手な子どもが多くなっている傾向がある。
- ・保護者の価値観や就労形態の多様化により、小学校入学段階に必要な基本的な生活習慣が身につけていないといった課題もある。

幼児期の教育

- 幼児期は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期であり、この時期に質の高い教育・保育を受けることは、子どもたちの健全な成長にとって極めて重要
- 「環境を通して行う教育」であり、「遊びを通しての総合的な指導」が大きな特徴
- 平成29年に保育所保育指針等が改定され、保育所も幼稚園や認定こども園とともに「幼児教育施設」に明確に位置づけられ、一層の整合性が図られるとともに、これらに共通するものとして「遊びを通しての総合的な指導」を通じた「幼児教育において育みたい資質・能力」が示された。



県の主な取組

- 【県内のどこにおいても質の高い教育・保育が受けられることを目指して】
- ◆ 幼稚園教育要領、保育所保育指針等に基づく保育実践の徹底（園内研修支援・ブロック別研修支援等（R2:272回））
- ◆ 園評価の手引きの活用（R2:研修会2回、個別支援45園）
- ◆ キャリアステージ別研修の実施（基礎・中堅・管理職 R2:58回）
- ◆ 特別支援教育・保育（R2:オンデマンド研修6回）

子供が夢中になって遊ぶ中で、様々な体験を通して、資質・能力が育まれていく。  
乳幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習。

遊びは幼児期にふさわしい学び

幼児期は、遊びを中心として、頭も心も体も動かして、主体的に、様々な対象と直接かわりながら、総合的に学んでいく。  
 遊びを通して思考を巡らし、想像力を発揮し、自分の体を使って、また、友達と共有したり、協力したりして、様々なことを学ぶ。



（R3：第1回幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会資料）

保幼小連携・接続

＜H29改定 保育所保育指針等のポイント③＞

- 幼児期の教育を通して見られる「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」（※）が示され、それを手がかりにして、幼児教育と小学校教育との接続を図ることが明確化された。

※「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」

- ①健康な心と体
- ②自立心
- ③協同性
- ④道徳性・規範意識の芽生え
- ⑤社会生活との関わり
- ⑥思考力の芽生え
- ⑦自然との関わり・生命尊重
- ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ⑨言葉による伝え合い
- ⑩豊かな感性と表現

- 小学校教育においては、**生活科を中心としたスタートカリキュラム**を学習指導要領に明確に位置付け、（中略）幼児期に総合的に育まれた資質・能力や子供たちの成長を、各教科等の特質に応じた学びにつなげていくことが求められる。

県の主な取組

- 【モデル地域（田野町・越知町・黒潮町）の取組の県内全域の普及に向けて】
- ◆ 接続期カリキュラムの実施・見直し・改善（保幼小の教職員が共に見直す）
- ◆ 幼児・児童の交流活動：年間3回（互恵性のある活動を実施する）
- ◆ 教職員の連絡会等：年間3回（幼児・児童の姿を通じた話し合いのもと、互いの教育についての理解を深める）
- ◆ 県保幼小連携・接続プロジェクトチームによる支援

【拡充する取組案（県からの提案）】

- ★ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等の理解を深めるための研修
- ★ 園と小学校の教職員同士の顔の見える関係づくり